

本展示会は、多様な媒体により日本の住居に新たな光を投げ、特異なオブリジェとして、またそれ以上に生活空間としての側面について探るものである。

まず1933年から1984年の間に建てられた14点が取り上げられているが、この家屋のほとんどは、明治時代から昭和初期にかけて日本の建築において伝統的手法がほぼ用いられなかったことの欠落を補おうとしている。これら設計の多くは、伝統建築に関する再発見と一種の理論化、そして西欧的影響を受けた近代性をも含む混合的な様式である。

また20点ほどの最近の住居は、西欧より引継いだ遺産から日本の建築が自由になり、世界中が認める日本建築固有のアイデンティティが約20年前から再び生まれたことの証となっている。このように見てみると日本の家は時代の流れをものともしないことがわかる。現代的な装いであ

ても、16世紀の数寄屋造りの登場以来さほど変わらざに受け継がれてきた価値観や長所である落着きや穏やかさ、優美さ、各構成部との関係性、そして精神性をも内包している。この世でのあり方に一種の永遠性、連続性を伝える日本の生活様式自体が、これらをもたらししている。

展示空間もこの気取らなさ、洗練の趣味を反映したものとなっている。合板の木製パネルは、「昨日の家」や「今の家」のいくつかが呈する控え目で植物由来の香りを想起させる。加えて、写真や、住人と建築家のインタビューを収録した図録、優れた映像も会場で紹介され、この家々の官能性、柔和な洗練ぶりを余すところなくあぶりだすものとなっている。風や光、影、私的な場面や開かれた場面などとの対話のなかでその意義を發揮し、さらに創意や的確さ、繊細な感性で日常のなんでもない所作に込められるという、形式ばらない日本の住宅建築の特徴を十二分に体感させてくれる展示会である。(Frank Saitama/建築家)